

魔法のプロジェクト2021 活動報告書

報告者氏名: 菊地 憧 所属: 京都市立桃陽総合支援学校 記録日: 2022年2月11日

キーワード: 病弱

【対象児の情報】

・学年

小学部2年

・障害名

病弱, 知的障害

・障害と困難の内容

病気治療のため入院中

・使用した機器に

iPad iPhone watch chromebook AIスピーカー Pepper

【活動目的】

・当初のねらい

<目標>

1. 言葉やサイン, 文字カード等によってコミュニケーションをとることができる。

2. 活動のベースとなる基礎体力の向上を目指す。

・実施期間

令和3年6月～令和4年2月

・実施者

菊地 憧

・実施者と対象児の関係

授業担当児童

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

1. 言葉やサイン、文字カード等によってコミュニケーションをとることができる。

- ・もののイラストを見ながら、「ぼうし」などその名称を言うことができる。
- ・食べ物の名称を聞いて、イラストカードから選んで手渡すことができる。
- ・イラストを見ながら、その名称の穴抜き部分に正しいひらがなを選ぶことができる。
- ・文字だけを見て、全てのひらがなを読むことは難しい。
- ・ひらがなを書くことは難しい。
- ・指導者のあいさつに対して、「おはよう」「バイバイ」などの返事をするができる。
- ・自分の好きなことや伝えたいことは「〇〇」と一単語で伝えたり、指差しをしたりできる。
- ・はっきりとした言葉で二語文以上話すことは難しい。
- ・伝えたいことがあってもどのように言ってもいいかわからないときは、なんとか伝えようとするが発音不明瞭な言葉になり、うまく伝えられない。
- ・入院生活になり、周囲の人との関わりが減ってしまったことから、言葉数が減ってきていると保護者は感じている。

2. 活動のベースとなる基礎体力の向上を目指す。

- ・体を動かすのが好き。音楽を聞いたりダンスを踊ったりするのが好きで、ダンスサークルにも入って活動していた。
- ・音楽に合わせて身体を上下に動かしてリズムをとることができる。「パプリカ」の曲に合わせてダンスをすることができる。
- ・入院生活になり、運動できる場所や機会が減ってしまっている。もっと動きたいという気持ちがあるが、体調面や環境面から、運動が難しい状況にある。
- ・闘病生活のため、体調不良はもちろんあるが、体力が落ちてきている。疲れから集中が途切れ、ぼーっとすることがある。
- ・病室や、一時退院中の自宅での過ごし方が、iPad で動画を見ることばかりになってしまい、体を動かす時間が減っている。体育の時間も、座って活動するのがほとんどであり、長時間立って活動するのは難しい。

・活動の具体的内容

1. 言葉やサイン、文字カード等によってコミュニケーションをとることができる。

(1) 認知力、注意力を身につける。

- ・認知力や注意力についてどの程度身につけているかを図り、育む活動を行おうと考えた。iPad であれば病室から出られなくても行うことができ、また日常的に iPad で動画を見るなどしているため操作に慣れており、本児の関心も高いことから、有効ではないかと考えた。

① アプリ「Bimi Boo」シリーズの活用

- ・「Bimi Boo」シリーズでは、図形を認識したり、数や色を認知したりするゲームに取り組むことができる。直観的な操作でできることから、何度か取り組むうちに本児一人でも進めることができるようになった。



<病室で取り組む様子>

(2) 言葉と文字を一致させる。

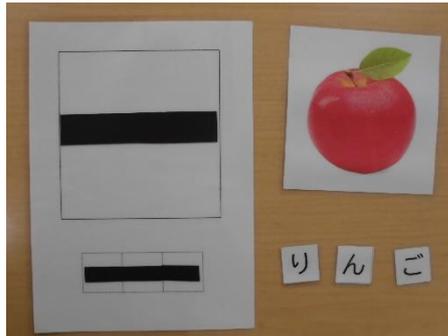
・コミュニケーションの幅を広げるため、伝えられる言葉を増やすこと、ひらがなを理解できるようになることを目指した。そこで、音声と文字を一致させていく活動を行った。

① フラッシュカード

- ・動物や食べ物のイラストと、名称が平仮名で書かれたフラッシュカードを作成。指導者が平仮名を指さしながら一緒にカードを読み上げて、文字と音声の一致を図ることに取り組んだ。
- ・次に文字だけを見せ、正しいイラストを選ぶという活動を行った。初めは指導者が文字を読み上げて、イラストを選んでもらうことから行い、少しずつ文字を見せて「これは？」と尋ねるようにした。何度も繰り返すうちに、文字だけを見て読み上げることができ、正しいイラストを選ぶことができるようになった。



<ひらがなとイラストが一緒になったフラッシュカード>

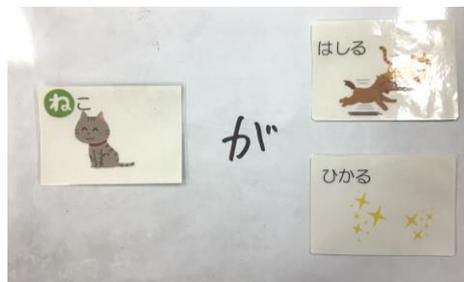


<ひらがなとイラストが別々になったフラッシュカード>

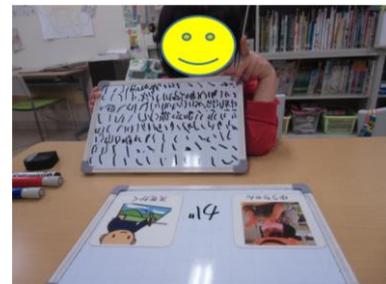


<カードを選ぶ様子>

- ・「食べる」「走る」などの動詞カードと合わせることで、二語文を作って話す練習を行った。また、人物カードと行動カードを合わせて実際に行う指示ゲームを行った。その際にジェスチャーもつけることで、より分かりやすく伝えられるようになることを目指した。



<ひらがなカードと動詞カード>



<人物カードと行動カード>

② アプリ「ひらがな」の活用

- ・「ひらがな」では、文字を見ながら音声で聞き、なぞりながら覚えていく活動に取り組むことができた。ひらがなを書けるようになることよりも、音声をたくさん聞いて文字と一致させられるようになることと、いろいろな言葉がでてくるのでそれらに多く触れることで、語彙を増やしていくことをねらいとした。



<取り組む様子>



(3) カードによって意思疎通をはかる,ドロップトークの活用

・休み時間等に,自分のやりたいことを伝えるためにカードを作成した。これらのカードを指導者にわたしながら「はさみをください」と発声し,自分の意思を伝えられるようにした。気持ちカードを作り,自分の気持ちや体調を指導者に伝えられるようにした。これらのカードはドロップトークにも同じものを用意し,選択できるようにした。



<やりたいことカード>



<気持ちカード>



<ドロップトークの画面>

2. 活動のベースとなる基礎体力の向上を目指す。

(1) 運動量を確保し,基礎体力を維持する。

・本児は入院前,ダンスサークルに通っており,音楽を聞いたり踊ったりすることが好きである。入院生活中の運動機能を低下させないために,また,病室や一時退院中の自宅での過ごし方を充実させるため,運動する機会を設けようと考えた。

① 体育,自立の時間での活動

・体育でダンスに取り組んだ。教室に登校できた際は一緒に踊り,動画を見ながら取り組んだ際も,しっかりと踊ることができた。動画は自室でも見ながら取り組むことができるようにした。自宅に一時退院していた時も,オンラインでつないでダンス活動を行った。また,自立の時間などを活用して卓球バレーや,ふうせんバレー,コグトレ棒などを使って体を動かす機会を増やしていった。



<動画を見ながら踊る様子>



<自宅とつないで踊る様子>

② 前籍校との交流活動

・前籍校との交流学习を行った際に,全校ダンスを一緒に踊る活動を行った。このダンスを継続して踊ることで運動不足解消と,前籍校に戻った際にも活動に入りやすくなると考えた。



<交流活動でダンスを踊る様子>



・対象児の事後の変化

1. 言葉やサイン、文字カード等によってコミュニケーションをとることができる。

- ・「Bimi Boo」アプリを使った学習では、指導者がiPadを準備しているのを見ると指さして「アイパッド!」というほど楽しみにしているようだった。「こう操作したらこう反応する」ということを理解して取り組んでいる様子があった。形や図形、色についてきちんと把握し、初めは間違えることも多かったパズル問題も正解することが増えてきた。
- ・フラッシュカードによる文字と言葉を一致させる活動では、なじみのある食べ物や動物などは間違えることは少なかったが、あまりなじみのない言葉であるとうまく発音できなくなることがあった。初めはイラストを見て発音することが多かったが、少しずつ書いてある文字を指で追いつながりながら読むことが増えていった。自らカードを見て読むようにしたり、自分の指で一文字ずつ確認しながら読んだりする様子が見られた。やがて、ひらがな単体や単語の言葉のみを見ても読み上げることができるものが増えており、文字と言葉が一致するものが増えてきた。
- ・似ている平仮名の間違いでは、「よる」の「よ」を「な」と間違え、「な」がつくものを連想してか、「よる」を「ばなな」と言うこともあった。しかし、これはイラストではなく文字を読むようになっていると考えられる。また、正解が分かっているにもかかわらず間違えるといった、活動に対する余裕が見られる時もある。
- ・「ひらがな」アプリでは、アプリが読上げる音声に合わせて発声する様子が見られた。また、アプリ内の音声（「あ、を探して」等の指示音声）をマネして発声することもあった。ひらがな単体で出てきても読めるようになってきている。フラッシュカードと合わせて活動する中で、ひらがなに慣れてきた様子が見られる。
- ・カードを使って二語文を作る際は、主語に合わせて選び、読み上げることができた。また、その際にジェスチャーを交えながら言うこともあった。
- ・気持ちカードを選ぶことで、今日の体調を伝えたり、作品を作った感想を伝えたりすることができた。やりたいことカードを使って、休み時間に指導者に手渡ししながら発声し伝えることができた。慣れてくると、カードがなくても発声のみで伝える姿もあった。
- ・作品の発表などで、自分の言葉で伝えようとする姿が増えた。授業の始めと終わりの挨拶でも、「あいさつしてくれる人?」と聞くと自ら手をあげて言うことが増えた。指導者と一緒に発声していたが、徐々に一人でも発声することができてきている。

2. 活動のベースとなる基礎体力の向上を目指す。

- ・休み時間にも、コグトレ棒やピンポン球で遊ぼうとすることが増え、自然と立ち上がって動く場面も増えてきた。
- ・ダンスは知っているものに関しては、曲が流れるとすぐに踊り始め、楽しそうな様子が見られた。立って踊ることもあった。終わるとすぐに座り、疲れた様子が見られた。映像であっても集中して行うことができる。しかし、2,3曲続けて踊ると疲れるのか、踊りをやめることがある。少し休憩をおくと、再開することができる。
- ・自室では「Baby shark」の動画を見ながらダンスをすることがあった。
- ・オンライン越しでもこちらと会話したり、音楽を聞いてダンスに取り組んだりすることができた。
- ・授業で教員、母親、本児とでダンスを行うよりも、交流活動で前籍校の教員や友達と一緒に踊る時のほうが集中して取り組むことができた。交流活動では、集中を切らさずに参加することができた。

【報告者の気づきとエビデンス】

主観的気づき

コミュニケーションの幅が広がり、自分の思いを伝える姿が増えたのではないかと。

- ・本人から伝えたい思いが出てきて、単語ではなく長く話をするが増えた。家族や先生たちの絵を描いたときには、「母ちゃん、父ちゃん、先生と…」と一人ひとりを紹介して話す姿があった。図工などで作った作品を紹介するときは、「こ

れと、これで…」と、不明瞭ではあるが言葉が止まらず話し続けて、伝えようとする思いが感じられた。授業の挨拶でも、自分がしたいと挙手をする事が多い。指導者と一緒に発声していた「これで2時間目の学習を終わります。ありがとうございました。」という言葉も、一人でも言えるようになってきている。前籍校では、授業の挨拶とともにハンドサインを行っていたようだが、交流活動の際はそのハンドサインをしながら挨拶する姿があった。休み時間に「何かしたいことはありますか?」と聞くと、手で切るジェスチャーをしながら「はさみ、ください」と言う姿があった。

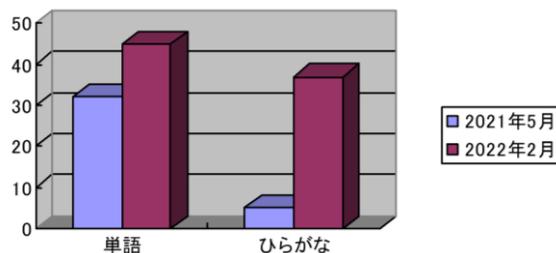
・たくさんの音声を聞いたことが、語彙の増加につながったと考えられる。カードでのやりとりやアプリの音声、動画視聴など様々な音声を聞いて、それをマネしようとする事で言葉の獲得につながったと考えられる。

オンラインでの学習に慣れることで、交流活動にしっかり参加できたのではないかな。

・自室や自宅で動画を見ながらダンスをするのは、本人の気分次第などところもありなかなか定着することは難しかった。しかし、動画やオンラインでの学習を続けることで、それに慣れることができた。入院当初は、オンラインの場合集中ができなかったり、こちら話を聞けなかったりすることが多かった。しかし、現在はオンラインであっても返事をする事ができるようになった。そのため、前籍校とつないだ交流学习において、難しかった45分間の集中を保ち活動することができた。オンラインで学習できることは、今後も前籍校とつないだり、登校できない状況にあっても学習できたりすることにつながる。

エビデンス(具体的数値など)

・ひらがなとイラストが一緒にかかっているフラッシュカードに書いてある単語を正しく読めたのは5月時点で32個、ひらがな単体で正しく読めたのは5個だった。2月現在は、それぞれ45個、37個と数が増えている。



・病室から出られない、一時退院中などによりオンライン授業となった日は1学期と2学期合わせ30日間で、やり取りをきちんと行いながら授業を行えたのは5日間だった。3学期は5日間のうち2日つないで学習できた。また、3学期につないだ際は、こちらの指示に「うん」と返事したり、画面に自分の作業したものを見せたり、今までにないやり取りをすることができた。

	1学期と2学期	3学期
オンライン授業日数	30	5
オンライン参加日数	5	2

その他エピソード

・同じく入院している友達と、コミュニケーションを積極的にとろうという姿勢が見られるようになった。オンラインの画面上でも友達を見つけると、その友達の名前を呼んで手をふったり、声をかけたりすることがあった。入院当初は、病棟のプレイルームで他児と遊ぶことは少なかったが、現在は教室で友達とボールやレゴをして遊ぶ場面もみられる。



・母親からは、「ひらがなのカードは完璧やなあ」という言葉がけがあった。カードに書かれている単語は自信をもって言うことができるようになり、本人から休み時間にやりたいこととして「カード!」と要求する場面もあった。

・2月現在、入院しての治療は終了し、まもなく退院する予定である。退院後は通院しながら治療を続け、本人の様子を見ながら少しずつ前籍校へ登校していくことになる。今後は、前籍校通学に向けて、体力作りやスムーズに活動に入るための運動、またコミュニケーションの幅を広げていくことで、できることをさらに増やしていきたい。